横浜市民ギャラリーコレクション展

2007年
2月28日（水）～3月21日（水・祝）
横浜市民ギャラリー（3階C展示室）
入場無料

閉館時間：10時～18時（入室は17時30分まで）
休館日：会期中なし
主催：横浜市民ギャラリー（横浜市芸術文化振興財団）
後援：横浜市、神奈川新聞社、
tvk（テレビ神奈川）、RFラジオ日本、
FMヨコハマ、横浜市ケーブルテレビ協議会

穀村

絵をよむ

牛田雞村
「蕓街の夕」《蟹港二題》より
1926年（昭和元）、絹本着色
63.0×113.0cm

「横浜市民ギャラリーコレクション展」は、当ギャラリーの収蔵作品を年に一度公開する展覧会です。当ギャラリーには、一九六四年に開館して以来開催した展覧会の出品作品をはじめ、横浜にゆかりのある作家の代表的な作品を中心に日本画、油彩画、版画、写真、素描、彫刻など、一、二〇〇点を超える作品が収蔵されています。

今回は「絵をよむ」というテーマのもと、当ギャラリーの日本画と油彩画のコレクションの中から三十八作家・四十三作品を選りすぐり、絵画を読み解くことから始まる鑑賞を楽しんでいただこうと思います。絵画は様々なものが描かれて、その画面が構成されています。作家が何を意図してそのモチーフを選び取ったのか、またどうしてこのように表現したのか。モチーフの組み合わせにはどのような意味が秘められているのか。ワークシートのキーワードなどを頼りに、絵に描かれたイメージを自由に解釈して、「絵をよむ」楽しさを体験していただきます。

YOKOHAMA CIVIC ART GALLERY
横浜市民ギャラリー

◎ **出品予定作家**
（五十音順）
○浅見信夫
○伊沢三都子
○市川勉
○伊藤三喜庵
○今関一馬
○入江正巳
○岩田栄之助
○牛田雞村
○江見絹子
○大山鎮
○岡村芳男
○岡本唐貴
○鎌田方晴
○川村信雄
○北久美子
○坂口登
○阪本文男
○櫻庭彦治
○志村計介
○芹沢龍吉
○高間惣七
○竹中恵美子
○田澤茂
○田島奈須美
○田中岑
○土井俊泰
○長宗希佳
○中村好宏
○浜田三郎
○林敬二
○兵藤和男
○平野杏子
○福島瑞穂
○福地敬二
○古川益弘
○益井三重子
○緑川廣太郎
○四谷十三雄

※出品作家については都合により変更することがあります。ご了承ください。

横浜開港150周年　文化芸術創造都市・横浜　YOKOHAMA NIIGATA SUMMIT 2008

絵をよむ

横浜市民ギャラリーコレクション展

展覧会に出品される作品の一部を紹介します。いずれも横浜にゆかりのある作家の作品、あるいは横浜の風物に取材した作品です。画面からは作者のどのような意図がよみとれるでしょうか。ぜひ実際に会場に足を運んで、絵を「よんで」ください。
出品作家については都合によりやむを得ず変更することがあります。ご了承ください。

出品作家・田澤茂氏のスペシャルトーク

日時：3月10日[土]14時30分～16時頃
場所：横浜市民ギャラリー3階C展示室

田澤茂氏（新制作協会会員）によるスペシャルトークを開催します。自作のみならず友好を結ぶ出品作家の作品についても、エピソードを交えながらお話していただきます。

学芸員によるギャラリートーク

牛田雞村の作品を中心に

日時：3月11日[日]15時30分～16時
場所：横浜市民ギャラリー3階C展示室

「ニューアート展2006 糸と布のかたち」出張ワークショップ作品を展示

二〇〇六年九月二十九日から十月二十二日に開催した「ニューアート展2006 糸と布のかたち」の関連事業として、出品作家眞田岳彦さんが横浜市立永田小学校（南区）でワークショップを行いました（横浜市芸術文化教育プログラム連携事業）。このワークショップで子どもたちが制作した作品をコレクション展の会場内で、展示します。企画・展示は当ギャラリーのボランティアの皆さんが中心となって行います。

牛田雞村「蜜船の泊」《蟹港二題》より 1926年
絹本着色｜63.0×110.0cm

牛田雞村「関内」1926年
絹本着色｜63.3×100.3cm

林敬二「横浜港」1988年
キャンバス、油彩｜91.0×116.0cm

長宗希佳「称名寺を眺む」1988年
キャンバス、油彩｜116.7×80.3cm

伊藤三喜庵「文楽の人形たち」1982年
紙本着色｜134.0×173.0cm

浅見信夫「花（品濃一里塚）」1988年
紙本着色｜80.0×100.0cm

入江正巳「春光（三渓園鐘明寺本堂）」
1988年｜紙本着色｜65.5×91.5cm

田澤茂「ベイブリッジ建設風景」1988年
キャンバス、油彩｜115.5×91.0cm

土井俊康「朝の埠頭」1988年
キャンバス、油彩｜91.5×117.0cm

益井三重子「風薫る」1988年
紙本着色｜128.0×72.0cm

鎌田方晴「虹」1972年
紙本着色｜150.0×180.0cm

[おことわり] 掲載作品の中に、著作権者を特定できないものがあります。お心当たりの方は、お申し出ください。

問い合わせ先：
横浜市民ギャラリー

〒231-0031
横浜市中区万代町1-1
Tel.045-224-7920
Fax.045-224-7928
http://www.yaf.or.jp/ycag/
E-mail:ycag@yaf.or.jp

800坪の売場に創造をかきたてる
素材と道具が100,000アイテム!
クラフト・画材・文具の店
Uni art
ららぽーと横浜ノースノード3F
2007.3.15 OPEN!
営業時間10:00～21:00
http://unidy.info/uniart/

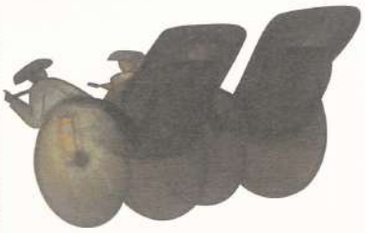
Art
絵具、イーゼル、キャンバス、画筆、書道・日本画、パステル、色鉛筆、デザイン用品、製図用品、文具
Frame
油彩額、デッサン額、写真額、日本画額、オーダーフレーム、マット加工、裏打ち・表装加工
Craft
彫金、シルバークレイ、ステンド、ペイントクラフト、レザークラフト、陶芸、染色、鉄道模型

●車でのアクセス
東名高速道路 横浜青葉ICより4.5km
第三京浜 港北ICより2.5km
●電車でのアクセス
JR横浜線「鶴見」駅より徒歩7分
横浜市鶴見区池辺町4035-1（NEC横浜事業場跡地）

牛田雞村は1890年（明治23）、現在の横浜市中区に生まれました。この作品は「蛮船の泊」（チラシ裏面に掲載）と共に「蟹港二題」として再興第13回院展（1926）に出品されたものです。これに「関内」（裏面掲載）を加えた3作品が1829年（昭和4）に開港70周年を記念して雞村から横浜市に寄贈され、野毛山にあった市長公舎に長らく飾られていたそうですが、1991年（平成3）横浜市民ギャラリーに寄託されました。「蟹港」とは蟹が横歩きをし、港が浜にも通じる意から「横浜」を指し、「藁街」は漢時代にあった長安城中の町の名前で、転じて中華街を指すといわれています。

ガス灯がほのかに闇を照らし、白い服の車夫が人力車で客待ちをしているようにみえます。2台はまさに並んで走り出したところでしょうか。セーラー服の外国船の乗組員や辮髪の清国人など、いく人かの人が行き交う街角では、西洋風の建物の中から明かりがもれ、どこか詩情が感じられます。雞村はどのような意図でこの絵を描いたのでしょうか。絵に描かれているいくつかのモチーフから考えてみましょう。

一見すると船のマストのようにみえますが、様々な国の公館に国旗などを掲揚するためのポールだと思われます。塀の中の建物も領事館など公的なものであった可能性があります。



人力車は1869年（明治2）頃日本で発明されました。駕籠より速いと評判で、またたく間に普及しましたが昭和のはじめにはほとんど見られなくなりました。

市街用のガス灯は1872年（明治5）に日本で初めて横浜で点灯されました。この頃の明かりは黄色、1886年（明治19）頃に改良されたものは青みがかったものだったということですから、おそらくこの絵の中のガス灯は後者でしょう。人力車は1869年（明治2）頃に日本で発明されました。駕籠より速いと評判でおおいに普及しましたが、昭和初期にはあまり目にすることはなくなりました。車輪にゴムタイヤが採用されたのは明治20年代末頃からといいますが、この人力車ではそれ以前の鉄製のもののようにみえます。また、画面左手に見える船のマスト状のものは旗を掲げるポールです。1859年（安政6）の開港後は各国の領事館が横浜に建てられました。塀の中にある建物はそのような公的な機関であった可能性があります。「萬泰」という金看板の店やその右手の両替商も実在していたかもしれません。

雞村が盛んに絵筆をふるった明治後期から大正期は、近代化の中で多くのものが目まぐるしく変化していった時代です。また1923年（大正12）には関東大震災という大惨事が起こり、横浜も塵芥に帰しました。雞村が追想して描いたのは自分が育った土地の、おそらく少年期の光景です。雞村が選び取ったモチーフやそれらの組み合わせから、雞村の心情を「よむ」ことができるかもしれません。

漢字を用いて日本人と筆談することができたため、清国の人々ははじめのうち主に外国公館に雇われる形で来日しましたが、そのうち自分で商売を始める人も現れました。「萬泰」という屋号の店も、実在したのかもしれません。

【牛田雞村略歴】
1890年（明治23）現・横浜市中区南仲通生まれ。1906年（明治39）東京中央商業学校卒業後、横浜の外資系石油会社に勤めるが、翌年画家を志し退職、松本楓湖の安雅堂画塾に入門する。巽画会や紅児会に出品し頭角を現す。1913年（大正2）頃より三溪・原富太郎より援助を受けはじめる。1914年（大正3）第1回再興院展に「柳」を出品し院友となる。1915年（大正4）には今村紫紅らとともに目黒で赤曜会を結成し展覧会を開催。翌年、紫紅の急死後は神経衰弱にかかり、横浜に戻る。1917年（大正6）三溪の援助で朝鮮半島を旅行。その後も院展に何度か出品するが、戦後は一度だけ出品したのみで画業を引退、春日光の名で京舞の舞台美術を担当する。1976年（昭和51）没、享年86。

横浜の実業家・高島嘉右衛門が横浜に「横浜瓦斯会社」を設立し、市内に日本で初めてガス灯がともされたのは1872年（明治5）。その明るさに人々は驚愕したということですが、大正初期より次第に電灯に代わっていきました。

牛田雞村
「蓁街の夕」《蟹港二題》より
1926年（昭和元）、絹本着色
63.0×113.0cm

絵をよむ

Designed by NDC Graphics 2007